

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：43924

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730641

研究課題名(和文)コンボイモデルを用いた定年退職期におけるソーシャルネットワークに関する縦断的検討

研究課題名(英文)Longitudinal study of social network with the convoy model in a retired period

研究代表者

森山 雅子(MORIYAMA, MASAKO)

愛知江南短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：90532432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：コンボイモデルを用い定年退職期のソーシャルネットワークについて明らかにすることを目的とし、定年退職者の心理的健康の実態、中高年者のソーシャルネットワークの様相と心理的健康の関連について検討した。定年退職者において、職業からの引退が生活満足感に影響を与えることを示唆した。また、中高年者の世代、性によるソーシャルネットワークの特徴を明らかにした。中高年者のソーシャルネットワークと自尊感情については正の関連が示された。

研究成果の概要(英文)：In order to clarify the social network revealed by the convoy model in retiree period, the aspect of psychological health of retirees, relationship between the condition of the social network of middle-aged and elderly people and their psychological health were examined. The result was suggested that retiring from the occupation influenced life satisfaction. Then, differences by gender and generation have been shown about the characteristics of the social network of middle-aged and elderly people. The associations between the social network and self-esteem of middle-aged and elderly people were shown positive.

研究分野：心理学

キーワード：ソーシャルネットワーク コンボイモデル 中高年 心理的健康

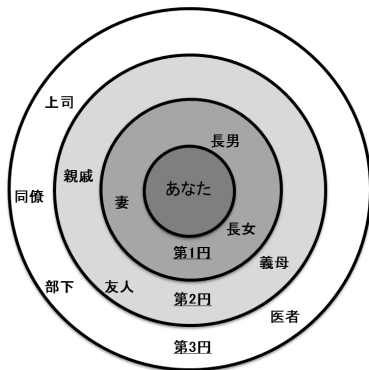
1. 研究開始当初の背景

わが国では、高齢化が急速に進み第二の人生に対するサポートは急務である。終身雇用制度が取られてきた我が国における定年退職期は、約40年働いてきた職場から引退し、職業中心の生活から家庭や地域中心の生活へと移る大きな転換期といえる。国内の研究では、定年前不安や定年後の寂しさの中で「定年退職前の人間関係から離れること」が多く挙げられており(東京都老人総合研究所、1986)、「慣れ親しんだ職場での人間関係」から「家族や地域社会への人間関係」へ、という定年退職期のソーシャルネットワークの移行に対して不安を抱きやすいことが示されている。欧米よりもわが国の定年退職者の方が、職業に対する傾倒や職場との密接な関連があると指摘されている。これらの観点から、定年退職期におけるソーシャルネットワークの移行および、それと心理的健康との関連に対する研究が求められている。

また、

2. 研究の目的

本研究は、「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)」の大規模なコホート研究のデータを用い、定年退職期のソーシャルネットワークの移行と心理的健康の関連を検討することを目的としている。ソーシャルネットワークの移行を捉える方法としてコンボイモデルを用いる。コンボイモデルは、個人にとって重要かつ情動的に近い関係の人々を階層化された円に描くことで、ソーシャルネットワークを評価する方法である(図1)。



第1円 非常に親密な関係
第2円 親しいけれども、多少立場に影響される関係
第3円 ある程度の立場の上だけの関係

図1 コンボイモデルの基本的な構造

はじめに中高年者のコンボイモデルを用いたソーシャルネットワークの実態を明らかにする。そして、定年退職期のコンボイモデルの長期的・短期的な移行パターンを解明し、短期的な移行パターンと心理的健康との関連を検討し、心理的健康を維持するためのソーシャルネットワークの移行の総合的な仕組みを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者

本研究は、「国立長寿医療研究センター・

老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)」の長期縦断調査データを用いて行う。NILS-LSAは、40歳代から80歳代の地域住民約2400人を対象に、1997年から現在にわたり2年間隔で縦断的調査を実施している。専門の調査研究施設において、心理学的側面に加え、医学・遺伝子・形態・運動・栄養など、多岐にわたるデータが收拾され、非常に詳細な情報も得ることができる。心理調査は、自記式調査票、面接調査によって収集・蓄積されている。本研究実施時は、第7次調査(2010.7-2012.7)でデータ収集を実施した。

(2) 調査項目およびデータ収集

自記式調査票：調査項目として以下のものを収集した。個人背景要因：年齢、性別婚姻状況(既婚/その他)、教育年数、世帯年収、主観的健康感(1.良い-5.悪い)、定年退職後の就労の有無、定年退職経験を報告した年齢を尋ねた。CES-D：心理的健康のネガティブな側面として、Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (Rodloff、1977; 島他、1985)を使用。

LSI-K：心理的健康の肯定的側面として、生活満足度尺度K(古谷野、1996)を使用。

自尊感情：心理的健康における自己へ肯定的評価として、Rosenberg(1965)の日本語版(星野、1970)を使用。

面接調査：面接調査は、トレーニングを受けた心理学専攻の大学院生もしくは臨床心理士が聞き取りを行った。ソーシャルネットワークの指標としてコンボイモデルを尋ねた。

(3) 倫理的配慮

NILS-LSAの全調査・検査内容は、国立長寿医療研究センターの倫理委員会の承認を得ている。対象者には、NILS-LSA初参加の事前説明会を開催し、調査・検査内容の説明を行い、文書による参加同意を得た(2回目以降の参加に関しては書面にて調査・検査内容の説明を行い、文書による参加同意を得た)。

4. 研究成果

(1) 定年退職後の就労と心理的健康の変化

定年退職は人生後期における重要なライフイベントの一つである。定年退職後どのような生活を送り、どのような役割を持つかはその後の人生における心の健康にとって重要である。とりわけ、定年退職後の就労の有無は、約40年間続いてきた職業人としての役割の継続や喪失であり、心理的健康と関連すると推測される。本分析では、地域在住中高年男性の定年退職後の就労の有無と定年退職前後2年間の心理的健康の変化との関連について、縦断調査データを用いて明らかにした。

分析対象は、NILS-LSAの第2次調査(2000~2002)、第3次調査(2002~2004)、第4次調査(2004~2006)、第5次調査(2006~2008)、第6次調査(2008~2010)に少なくとも1回参加した中高年男性(1968名)のうち、第3次調査~第6次調査のいずれかで過去2年以内の定年退職経験を報告し、その2年前の

調査にも参加し、回答の不備のない169名(62.31±3.77歳)。定年退職後の就労の有無については、定年退職後有職者を就労継続群(108名)、定年退職後無職者を完全リタイア群(61名)とした。心理的健康については、CES-DとLSI-Kの2つの尺度を用い、定年退職前後について、定年退職前をTime1、定年退職後をTime2とした。

解析は、従属変数としてCES-D・LSI-KのTime1・Time2の各得点、独立変数として定年退職後の就労の有無(就労継続群・完全リタイア群)、調査時点(Time1・Time2)および定年退職後の就労の有無×調査時点の交互作用、調整変数として定年退職を報告した年齢、教育年数、定年退職前の世帯年収および定年退職を報告した調査回を投入した、反復測定分散分析を実施した。解析は、SAS.9.1.3を用いた。

表1 CES-Dにおける分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F値	有意確率
被験者間					
定年退職後の就労の有無	1	2.11	2.11	0.03	n.s.
誤差	163	10257.88	62.93		
被験者内					
調査時点	1	0.65	0.65	0.04	n.s.
交互作用	1	1.40	1.40	0.09	n.s.
誤差	163	2436.99	14.95		

注)年齢(Time2)、世帯年収(Time1)、教育年数(Time2)、調査回を調整した。

表2 LSI-Kにおける分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F値	有意水準
被験者間					
定年退職後の就労の有無	1	3.05	3.05	0.43	n.s.
誤差	163	1144.40	7.02		
被験者内					
調査時点	1	4.51	4.51	3.41	n.s.
交互作用	1	11.73	11.73	8.86	p < .01
誤差	163	215.92	1.32		

注)年齢(Time2)、世帯年収(Time1)、教育年数(Time2)、調査回を調整した。

分散分析の結果、CES-DおよびLSI-Kの分散分析表を表1・表2に示す。CES-Dでは、いずれの交互作用・主効果も有意ではなかった。LSI-Kにおいて、定年退職後の就労の有無×調査時点の交互作用が有意であった(F=8.86、p<.01)(図2)。そこで、調査

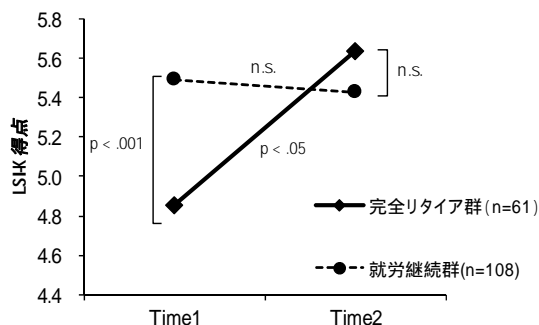


図2 定年退職前後のLSI-Kの得点の推移

注)定年退職後の就労の有無別に、年齢(Time2)、世帯年収(Time1)、教育年数(Time2)、調査回を調整した最小二乗平均値を示す。

時点別の効果を検討した結果、定年退職前(Time1)において、就労継続群が完全リタイア群よりも得点が高いことが示された(p<.001)が、定年退職後(Time2)における完全リタイア群、就労継続群における得点差は見られなかった。また、完全リタイア群

において、定年退職前(Time1)よりも定年退職後(Time2)の方がLSI-Kの得点が有意に高いことが示された(p<.05)が、就労継続群においては定年退職前後(Time1・Time2)のLSI-Kの得点差は認められなかった。

定年退職後の就労の有無と心理的健康の関連が示唆され、完全リタイア群では、生活満足感が定年退職後に上昇することが示された。この変化については以下の推測ができる。完全リタイア群は、退職後に対する予期不安を抱きやすいと推測される。そのため定年退職前に低値を示した生活満足感が、定年退職後の予期不安の解消により上昇した可能性がある。完全リタイア群は、退職前における仕事満足感や仕事コミットメントが低く、就労そのものの負担が要因となり、生活満足感の低さに影響したと推測される。そのため仕事から解放された定年退職後の生活満足感が高くなったと考えられる。これらについては、より以前も含めた長期的な生活満足感の推移の検討や在職中の生きがいや仕事への関わりを含めた検討が必要だろう。また、定年退職後の就労の有無は、抑うつの変化に関連しなかった。この点に関して、定年退職イベントの発生後から調査参加までの期間が最長2年間に及ぶため、抑うつの変化が生じていたとしても、より短期的な指標であるCES-Dを用いた本解析では把握できなかった可能性がある。抑うつの変化に関連する検討のためには、定年退職前後の詳細な心理的健康の調査が必要だろう。

定年退職後の就労の有無によりソーシャルネットワークの変化が推測されることから、定年退職前後のソーシャルネットワークの変化と心理的健康の関連が示唆されたといえる。

(2) 中高年者のソーシャルネットワークの多寡と自尊感情の関連

中高年期は、様々なライフイベントを経験する時期である。それにとともなう、新たな人間関係の構築や人とのつながりの喪失といったソーシャルネットワークの変動も多い。様々な経験によって構築された中高年者の社会的ネットワークは、自己のとらえ方や全般的な自信を示す自尊感情と関連すると推測されるが、その関連の様相は年代により異なる可能性も考えられる。そこで、中高年者のソーシャルネットワークの多寡と自尊感情の関連について、年代差の観点も含め明らかにする。

ネットワーク構成人数(以下、構成人数とする)として、コンボイモデルから、第1円、第2円、第3円および3つの円すべて併せたコンボイモデル全体(以下、コンボイ全体とする)の構成人数を算出(構成人数は、1対1の個人的なつきあいのある関係者のみ)(表3)。構成人数の平均値に基づき、コンボイ全体、第1円、第2円、第3円それぞれにおいて多/少群を設けた。

表3 男女別・年代別の構成人数の平均値および標準偏差

		コンボイ全体		第1円		第2円		第3円	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男性	40代	19.91	9.44	6.70	4.24	7.50	5.60	5.72	5.46
	50代	19.48	9.27	6.34	3.53	7.60	5.39	5.54	5.96
	60代	18.72	9.43	6.99	3.98	6.96	5.45	4.77	4.95
	70歳以上	15.96	8.20	6.81	3.78	5.53	4.70	3.62	4.37
女性	40代	20.13	8.89	7.36	3.52	7.66	5.46	5.12	4.80
	50代	20.55	8.85	7.79	3.83	7.52	5.00	5.24	5.03
	60代	20.11	7.95	8.26	3.85	7.31	5.01	4.54	4.29
	70歳以上	17.77	7.95	7.68	4.41	6.10	4.49	4.00	3.94

分析対象は、NILS-LSA の第 7 次調査 (2010.7-2012.7) に参加した 2330 名 (男性 1178 名、女性 1152 名。平均 61.39 ± 12.76 歳)。

解析方法は、構成人数の多/少群、年代群 (40 代/50 代/60 代/70 歳以上) およびその交互作用項を独立変数、背景要因 (配偶者の有無、就業の有無、世帯年収、教育歴) を調整変数、自尊感情得点を従属変数とし、コンボイ全体、第 1 円、第 2 円、第 3 円別に、男女別の共分散分析を実施した。その後の検定には Tukey 法を用いた。

共分散分析の結果 (表 4)、ここでは、構成人数の効果 (主効果および交互作用) に注目して述べる。男性では、コンボイ全体、第 1 円、第 2 円で構成人数の主効果 (少群 < 多群) がみられ、交互作用はみられなかった。

表4 自尊感情得点を従属変数とした共分散分析の結果(F値)

	構成人数の多少	年代	構成人数の多少×年代	その後の検定	
				少<多	40,70<60
男性	コンボイ全体	16.27 ***	11.43 ***	0.74	少<多 40,70<60
	第1円	30.95 ***	10.55 ***	0.86	少<多 40,70<60 70<50
	第2円	17.19 ***	10.67 ***	0.90	少<多 40,70<60
	第3円	0.85	11.18 ***	0.42	40,70<60
女性	コンボイ全体	11.57 ***	5.56 ***	3.02 *	少<多
	第1円	13.68 ***	5.72 ***	1.48	少<多
	第2円	6.18 *	6.15 ***	3.54 *	少<多
	第3円	1.73	6.15 ***	2.42	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

女性では、コンボイ全体、第 1 円、第 2 円で構成人数の主効果 (少群 < 多群) がみられた。また、コンボイ全体と第 2 円で交互作用がみられた (図 3・図 4)。コンボイ全体では、50 代と 70 歳以上において少群よりも多群の自尊感情得点が高かった。第 2 円では、50 代の少群よりも多群の得点が高かった。

中高年者において、ソーシャルネットワークの多寡と自尊感情が関連することが示唆された。男性においては、どの年代でも人とのつながりが多いほど、全般的な自己評価が高く自信をもちやすいことが示された。女性においては、年齢による差異が示され、50 代と 70 歳以上で、人とのつながりが多いものが少ないものよりも自己への全般的な評価が高いことが示された。この年代の女性の社会的ネットワークは、子の巣立ちや配偶者の死などのライフイベントによって変化が大きい可能性があり、今後はライフイベントも考慮したソーシャルネットワークの検討が必要であると考えられる。

(3) 親密性と間柄を指標とした中高年者のソーシャルネットワークと自尊感情の関連

どのような関係の人物が心理的健康と関連を与えるかを検討するために、コンボイモ

デルにより捉えた親密性と間柄を指標とし

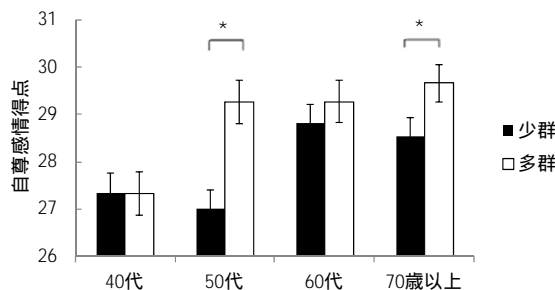


図3 女性のコンボイ全体構成人数の多少および年代別の自尊感情得点
注1) *: 各年代での構成人数の単純主効果を示した (p < .05).
注2) 最小二乗平均値を示した。

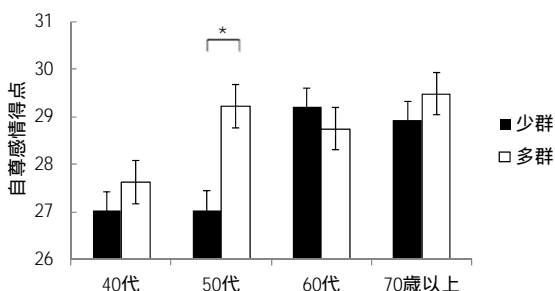


図4 女性の第2円の構成人数の多少および年代別の自尊感情得点
注1) *: 各年代での構成人数の単純主効果を示した (p < .05).
注2) 最小二乗平均値を示した。

て、中高年者のソーシャルネットワークと自尊感情の関連について、明らかにする。

コンボイモデルから、3 層からなる親密性 (第 1 円、第 2 円、第 3 円) と 3 種類の間柄 (家族・親戚・知人) からなる 9 種類のソーシャルネットワークを構成し、各人数を算出した。9 種類のソーシャルネットワークとは、「第 1 円家族 (非常に親密な 2 親等以内の親族)」、「第 1 円親戚 (非常に親密な 3 親等以上の親族)」、「第 1 円知人 (非常に親密な「家族」「親戚」以外の人物)」、「第 2 円家族 (親しいけれども、多少立場に影響される関係の 2 親等以内の親族)」、「第 2 円親戚 (親しいけれども、多少立場に影響される関係の 3 親等以上の親族)」、「第 2 円知人 (親しいけれども、多少立場に影響される関係の「家族」「親戚」以外の人物)」、「第 3 円家族 (ある程度の立場の上だけの関係の 2 親等以内の親族)」、「第 3 円親戚 (ある程度の立場の上だけの関係の 3 親等以上の親族)」、「第 3 円知人 (ある程度の立場の上だけの関係の「家族」「親戚」以外の人物)」であった。(表 5)。

分析対象者は、研究成果 (2) と同じである。解析方法は、自尊感情得点を従属変数とし、第 1 段階に背景要因、第 2 段階に 9 種類のネットワークの構成人数を投入した階層的重回帰分析を男女別・年代別を実施した。

階層的重回帰分析の結果を表 5 に示す。第 1 段階投入後、男女ともにいずれの年代でも主観的健康感から正の影響が示された。また世帯年収や教育歴においても正の影響が示された。ソーシャルネットワークの効果に着目すると、男性では 50・60 代、女性では 50 代以上で第 2 段階投入後の有意な説明率の増

表5 ネットワークの構成人数の平均値および標準偏差

	男性							
	40代		50代		60代		70歳以上	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
第1円家族	5.39	2.53	5.37	2.53	6.27	3.64	6.11	3.28
第1円親戚	0.28	0.99	0.19	0.91	0.13	0.54	0.22	0.76
第1円知人	1.02	2.50	0.78	1.82	0.58	1.39	0.48	1.43
第2円家族	1.77	1.94	2.25	2.36	2.51	2.70	2.92	3.20
第2円親戚	0.98	2.46	1.26	2.70	0.85	1.83	0.57	1.44
第2円知人	4.75	4.91	4.08	4.52	3.60	4.78	2.04	3.15
第3円家族	0.08	0.40	0.12	0.56	0.24	0.86	0.19	1.12
第3円親戚	0.05	0.42	0.28	1.49	0.21	1.08	0.19	0.94
第3円知人	5.59	5.39	5.15	5.64	4.32	4.89	3.24	4.16

(上記の続き)

	女性							
	40代		50代		60代		70歳以上	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
第1円家族	5.47	2.33	6.25	2.91	7.15	3.48	6.38	3.54
第1円親戚	0.51	1.51	0.28	0.98	0.18	0.73	0.43	1.37
第1円知人	1.37	1.80	1.25	2.12	0.92	1.58	0.86	1.92
第2円家族	1.82	1.92	1.98	2.05	2.70	2.74	2.49	2.78
第2円親戚	0.94	1.95	1.05	1.94	1.05	2.20	0.72	1.72
第2円知人	4.90	4.53	4.48	4.57	3.55	3.87	2.89	3.51
第3円家族	0.16	0.61	0.42	1.50	0.28	0.97	0.13	0.66
第3円親戚	0.19	1.07	0.17	0.75	0.22	0.96	0.09	0.48
第3円知人	4.77	4.65	4.65	4.64	4.05	3.98	3.78	3.90

分が示された。男性では、50代で「第1円知人」「第3円家族」から正、60代で「第1円家族」「第1円知人」から正の影響が示された。また、女性では、50代で「第2円親戚」「第2円知人」「第3円知人」から正、60代で「第1円家族」から正、70歳以上で「第1円親戚」から負、「第1円知人」「第3円家族」「第3円知人」から正の影響が示された。

表6 自尊感情得点を従属変数とした男女別年代別の階層的重回帰分析の結果

	男性				女性			
	40代	50代	60代	70歳以上	40代	50代	60代	70歳以上
背景要因								
就業の有無	.04	.02	.09	.03	.08	.03	-.02	.06
世帯年収	.20***	.05	.12	.05	.12**	.10	.01	.08
教育歴	.07	.11	.10	.16**	.10	.01	.15*	.07
年齢	.01	.06	.10	.05	.05	.09	.05	.03
主観的健康感	.26***	.28***	.22***	.32***	.24***	.27***	.30***	.32***
ネットワーク								
第1円家族	.01	.13*			-.02	.23***	.06	
第1円親戚	.03	.00			-.05	-.03	-.12*	
第1円知人	.19**	.17**			.11	.05	.10*	
第2円家族	-.02	.06			.03	.01	-.06	
第2円親戚	.07	.02			.21***	-.07	.10	
第2円知人	.11	.10			.20**	.08	.01	
第3円家族	.13*	-.03			.01	.09	.11*	
第3円親戚	.02	.08			.05	.02	-.02	
第3円知人	.07	.02			.20**	-.04	.11*	
R ²	.15***	.20***	.20***	.14***	.11***	.27***	.20***	.21***
R ²	n.s.	.09**	.07**	n.s.	n.s.	.15***	.07**	.05**

注1) 表中の値はStep2の標準偏回帰係数(β)である。

注2) *p < .05, **p < .01, ***p < .001

親密性や間柄に着目したソーシャルネットワークと自尊感情の関連が示唆された。中高年者の自尊感情に対するソーシャルネットワークの効果は、性や年齢によって異なることが示された。特に、50代以降は、子どもの独立や仕事からの引退に伴いソーシャルネットワークに多様な変化が生じると推測され、その在り様が自尊感情の重要な要因となる可能性が見出された。男性では、退職等の移行期である50・60代において、親密度の高い知人の存在が重要であることが示された。女性では、50代以降で親密度中・低の知人等の存在が重要であり、女性が広く浅くソーシャルネットワークを持つことで自尊感情を高める可能性を示している。また、孫

の世話など家族のサポートを担う60代女性にとって親密度の高い家族の存在が重要な要因となることが特徴的であった。今後は、中高年者は、役割の移行や出来事などからNWを変化させる可能性があり、今後はNWの変化に伴う自尊感情の変化についての検討が必要になるだろう。

中高年者のソーシャルネットワークの多寡と自尊感情との関連(森山他、2015)と同様に、どのような関係性の相手との関係を持つかという間柄や親密性を組み合わせた観点からも、中高年者のソーシャルネットワークと自尊感情との関連に、年代と性別による違いがあることが示された。

(4) 研究成果のまとめと今後の展望

コンボイモデルを用いた定年退職期のソーシャルネットワークについて明らかにすることを目的とし、定年退職者の心理的健康、中高年者のソーシャルネットワークの実態について、NILS-LSAのデータを用いて検討した。その結果、重要な示唆が得られた。

第一に、本邦における定年退職者の実態に関する先行研究では、行動特徴や生きがい(佐藤ら、1998)、失業者との精神健康の比較(長田ら、1998)がとりあげられていたが定年退職者の心理的健康については検討されておらず、本研究において定年退職者の職業からの完全な引退が生活満足感に影響を与えることを示唆した意義は大きい。

第二に、コンボイモデルを用いた中高年者のソーシャルネットワークについてはその実態(Antonucci, et al., 2010)について明らかにされており、本研究では心理的健康の一部である自尊感情と関連することを示唆した。ソーシャルネットワークと自尊感情については、おおむね正の関連があり、男女や年代で関連が異なり、50代以降でネットワークの効果が見られることが示唆された。50代以降は、子どもの巣立ちや職業からの引退に伴いソーシャルネットワークの多様な変化が推測され、その在り様が自尊感情の重要な要因となる可能性が示唆された。また、女性は、男性よりも役割が多く、ソーシャルネットワークの推移が多様であることが推測され、女性が浅く・広いソーシャルネットワークを持つことで自尊感情を維持している可能性が示唆された。

今後の課題として、縦断的検討が必要と考える。本研究では、ソーシャルネットワークについて年代差について明らかにしたが、ソーシャルネットワークの縦断的な変化が心理的健康にどのような影響を与えるかについては十分に検討することが出来なかった。また、ソーシャルネットワークについてはライフイベントの効果が推測され、様々なライフイベントがどのような影響を与えるか検討する必要もあるだろう。ライフイベントの影響や各種要因を考慮に加えた上でソーシャルネットワークの変化がどのように起きるか、またその変化が心理的健康に影響を与

えるかを検討する必要があるだろう。本研究のデータは、施設型調査であり、仕事を休み参加できる程度の中高年の対象から得られたものである。ワーカホリックで、職業に強くコミットした対象においても本研究の知見が有効であるかについて、今後検討が必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

森山雅子・西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・大塚礼・安藤富士子・下方浩史・中高年者における社会的ネットワークと自尊感情の関連 -コンボイモデルにおける親密性と間柄に着目して-、日本老年社会科学会第57回大会、2015年6月13日、横浜。

森山雅子・西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・大塚礼・安藤富士子・下方浩史・地域在住中高年者における社会的ネットワークと自尊感情の関連 -コンボイモデルを用いて-、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京。

森山雅子・西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・坪井さとみ・安藤富士子・下方浩史・定年退職後の就労と心理的健康の変化との関連 -地域在住中高年男性を対象として日本発達心理学会第23回大会、2012年3月9日、名古屋。

6. 研究組織

(1)研究代表者

森山 雅子 (MORIYAMA MASAKO)

愛知江南短期大学・講師

研究者番号：90532432

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし